

- ・日時; 2017年7月8日(土)13:00~16:45 9日(日)10:00~16:45
- ・場所; 茨木市市民総合センター 302号室
- ・参加者数; 8日:22名 9日:21名 (両日参加:12名、学会員:6名)
- ・講師; 日本福祉文化学会顧問 園田碩哉氏



・趣旨; 福祉サービスの土台は「人と人のかかわりを豊かにすること」にある。制度を整え、予算を付け、専門家を配しても、この土台が無視されていたのでは、豊かな福祉を実現することはできない。この研修会では、人と人の関わりを豊かにする力を『関係力』として捉えなおし、自らの関係力の現状に気付き、それを広げ、高め、深めていく方向と方策を、参加者同士のワークを通じて追求することを目指す。

【研修内容】

- ・7月8日(土): 「関係力」「ナラティブ・アプローチ」についての講義、メンバー間の関係づくりのワーク、詩を読む、「関係力倍增懇親会」
- ・7月9日(日): 「ホスピタリティ」「ソーシャル・デザイン」についての講義、「コミュニケーションの癖」による自己分析、インタビューによる自己・他己分析、ソーシャル・デザインについてのワーク

【一日目】

<講義>【キーワード】「ナラティブ・アプローチ」

相手の話(物語)をどう聞かか ナラティブ・アプローチを踏まえて

- ・福祉現場の特色: 禁欲主義⇒「清く、正しく、美しく」
- ・福祉領域と一般社会とは、どう違うのだろうか?

●「支援」を問い直す

- ・支援にはクライアントのためという「善意」(私のためにやっている)が密輸入(よろしくないこと)されている
- ・支援に介在する権力の作用を読み解く⇒「援助する人」>「援助を受ける人」= 支配関係
- ・専門職とクライアントの関係は非対称的⇒援助者はケア関係から退出するという選択肢をもっているが、クライアントはケア関係から退出することができない

●ナラティブ・アプローチという方法⇒20世紀の終わり頃に入った方法

- ・無知の姿勢; 先入観を捨てる 隠れた偏見に気づく⇒自分に引き寄せがち 驚き
- ・相手の「物語」を聴く; ストーリーを共感的に受け止めつつ、内容を整理する⇒困難事例は特に
- ・「物語」に揺さぶりをかける; なぜ? 常識的な理解や判断を超える事情を明らかにする
- ・例外を発見する; 正反対の新しい物語の糸口を見つける⇒物語は一つではない
- ・もうひとつの物語を整える; 「こだわっている物語」との調整を図る

- ・支援目標を;問題からの回復でなく 物語の捉え方の変化をめざし、物語の「共同制作」を試みる⇒皆が問題と思うから問題となる
- ・複雑な物語を共有する;二者関係から広げて社会へ

*もちたい援助職としての姿勢(力量)

- ・一人ひとりの「物語」に付き合う力 ・「物語」を聴く力＝「関係力」
 - ・人は「心」で生きていることを知る力 ・かけがえのない「物語」を引き出す力
- (参考文献) 荒井浩道『ナラティブ・ソーシャルワーク』新泉社 2014

六車由美『驚きの介護民俗学』医学書院 2012

<コミュニケーション実習> ふれあいセッション&詩を読む

いくつかのワークを通して他者を知り、自分を伝え、関係を築く。詩の朗読を通して詩の心を表現し、伝える。

【二日目】

<ワーク> あなたの関係力を診断する

自らのコミュニケーションの癖を明らかにする。結果は参加者の9割が「関係力達人型」

<講義> 【キーワード】「ホスピタリティ」「ソーシャル・デザイン」

福祉の思想とおもてなし論

1. 福祉支援の基礎としてのおもてなし＝ホスピタリティ

福祉という営みは、人と人との関係を活性化し、豊かにする人間的支援活動である。その土台とな

るものは、支援の「対象者」を自由な意志をもった「主体者」としてとらえ、主体者同士の間で気持ちのいい関係を作る働きかけである。それは「おもてなし＝ホスピタリティ」という概念にあてはまる。

- ・福祉支援は「人を助けてやる」ことではない。(パターナリズムの否定)
- ・福祉支援とは、楽しく生き生きした時間をみんなで共有すること。(場の重視)
- ・人と人を結びつけるおもてなし＝ホスピタリティが問われる(社会性＝社交性)

2. 「おもてなし＝ホスピタリティ」をどう考えるか

<もてなす>モテは接頭語(＝対象の性質や様態を変えずに維持する、対象を大切にする意)相手の状態をそのまま大切に保ちながら、それに対して意図的に働きかけて処置する⇒まさに福祉を意味する

<hospitality>手厚くもてなすこと、歓待、(未知の人に)愛想のいいこと

<もてなし＝ホスピタリティの土台にあるもの>主客の対等な関係が基本。究極の「もてなし」は相手の主体化(主人公にする)に努めること

3. 高齢者や障害のある人たちとの関わり

身体が弱ったり、何らかの身体的ハンディキャップがある高齢者・障害者は、他者の支援(介助)を受けることが多くなる。その場合も「相互援助」の視点や発想を忘れてはならない。

⇒90歳代の方が、どのような社会を生きたのかを考える

- ・与えることで与えられる⇒子育て・ボランティア
- ・客と主人とは相互に入れ替わり得る存在⇒先生はコーディネーター、パーティの主催者と客
- ・人間能力の多様性と多面性に気付かされる⇒垣根を乗り越える、仕組みを変える、文化は世代を

超える、新しい価値を創って世代をつなぐ

・‘認知症’の人たちの面白さ、豊かさが見える

* 福祉を違った視点(政治・経済・時代・医療・文化等々)からみる⇒福祉の在り方がみえてくる。

(参考文献)上野千鶴子『ケアの社会学』大田出版 2011

<ワーク>人材探しインタビューと起業

選択した項目について関係ありそうな方に目星をつけ、なるべく多くの方にインタビューするというワークだが、容易ではなかった。その後、選ばれた5人の社長は人材を確保し、夢のあるユニークな起業案を練りあげ、披露し合った。楽しい社会づくりに貢献できそうな企画が出揃い、皆さんは転職しても十分能力を発揮し、生き抜いていく方々だと確信した。実現に向けて青写真を描き始めた方もいる。

研修会の成果大である。

<講義> ソーシャル・デザインという方法

* ソーシャル・デザインという方法とは

社会というのは私たちみんなで作り上げ、織り上げていくものである。1つの理想(アイデア)をもとに、社会をどのように組み立てていくのか、その「意匠」(=手作り)をみんなの知恵を集めて描き出していく方法

* ソーシャル・デザイン⇒社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)

1. 「デザイン」が暮らしを豊かにする

・モノを作る時に必要もの⇒「素材」と「エネルギー」

・モノが人間にとって価値あるものとなるために不可欠なもの⇒使い勝手をよくするためのアイデア⇒モノづくりの基本⇒このアイデアを生み出す力=デザイン

・大量生産—大量消費への抵抗=「速度」と「効率」からの脱却

2. 社会的な課題を楽しく・面白く・豊かに解決していく道を探る

「課題先進国」日本⇒具体的な課題:世界一の長寿国、地域社会の崩壊、格差の拡大、人々の孤立化、エネルギー問題、自然の破壊等々←それらの課題を解決するために必要な「デザイン思考」

* 社会を変えるための発想転換

・社会も「デザイン」によってよりよくなる ・大きな社会的課題を「自分のこと」として捉え直す

・「常識」「決まり」「当たり前」を疑ってみる⇒楽しく、面白く、豊かに解決。

* 社会的課題の解決を図るためのソーシャル・デザイン

・新たな価値を創り出し、これまでにない仕組みやプログラムを産み出す

<ワーク>ソーシャル・デザイン実習

・あなたもソーシャル・デザイナーになれる？

「未来をもっとステキに！自分の手で未来をもっとステキに！」

与えられた課題をいかに楽しく、面白く、豊かな発想で解決していくかをグループメンバーでデザインし発表。最もアピールしたと思われるグループに投票。その結果「政治に物申す」というテーマでソーシャル・デザインしたグループが最多得票を獲得。その内容は、「国民も政治家も顔を隠せば言いやすい、聞きやすい。そこで皆、着ぐるみをつけ、大きなイベント会場に100人ほど集まって問答する。多くの人々に知らせるためにテレビで全国放映する」というもの。圧巻！このソーシャル・デザイン、実現させませんか？

<全体を通して>

関係力達人型の参加者が多かったこともあり、研修会は終始、和やかな雰囲気にも包まれた。藺田顧問のソフトでユーモアあふれる講義はたいへんわかりやすく、皆さんの心にすっと入り、得るものがあったようだ。玉手箱から何が飛び出すのか想像もつかない、まさにわくわく・ドキドキの連続だった。

職場の人間関係に難しさを感じている参加者が多く、「関係力」というテーマは新鮮でタイムリーだったようだ。藺田顧問は「関係は結び直すことができる。」「一人の人間として主体性をもって生きる」「社会を違う視点からみる」というメッセージを皆に送って研修を終えた。

参加者から寄せられた感想の一部を紹介する。

“今回の研修を通じて、今まで何となく過ごしてきた自分を恥じ反省するとともに、これからの取り組み方に更なる工夫をこらすことが必要だと感じている。「自分が自立的な市民としてしっかりとする」ということが、世界中の人といい関係に繋がるということを教えていただいた。この「関係力」が社会を創っているともいわれ、それは福祉の世界も同じであるという。自分達でやれることは何か、自分でできるものは何か、小さなことから始めていくことが大切であると感じた。その力が重なりあって「関係力」ができ、やがて大きな力になり得るものであると感じた。私も福祉に関わる一員としてできることから始めていこうと思った。”

“余暇支援と思って参加したが、ソーシャルキャピタルまで話しが広がり、視点が拓けた。藺田先生が嘆かれるように、日本は余暇の意義に対する理解がまだまだ少ない。私は高齢者には必須のことだと思っているので、大学の授業でも取り入れ、ダイバーショナルセラピーの方をゲストスピーカーとして招き講義をしていただいている。幸い実習施設の中にも、先駆的にダイバーショナルを取り入れているところがあり、私もおおいに学んでいる。”

